

昭和63年3月25日

埼玉県立秩父高等学校「紀要第12集」抜刷

『世界史 授業書
先史世界の人々』の実践

—— 楽しくわかる授業の創造をめざして ——

田 尻 信 一

『世界史 授業書 先史世界の人々』の実践

— 楽しくわかる授業の創造をめざして —

田 尻 信 一

はじめに

私が授業書による授業実践を思い当たったのは、1981年に遡る。その年の8月、歴研西洋古代史サマーセミナーで、「世界史教育におけるギリシャ・ローマ」を報告した際に、私の実践『スパルタクスの蜂起』をみて、山川廣司さんから、「以前に帯広の方の高校で教師をされている白川さんという方が『スパルタクスの蜂起』の授業書を作られ、一つの事実を教材化し、世界史の授業を少しでも面白くする努力をされている」という話を聞いた。また、同じ頃、森谷公俊さんから、一光社から「楽しくわかる授業書シリーズ」で「世界史の授業書 スパルタクスの反乱」（白川隆信著 山川さんが話していた人と同一人物）という本を出ていることを教えて頂いた。早速、取り寄せて読んでみた。ほとんど同世代（当時20歳代後半）の教師が生徒達に喜ばれる教材を手にいれようとして、このように努力されている姿に大いに感動した。また、その内容も単なる興味本位なテーマでなく歴史教育の核となるべきことを真正面から迫っていくものであった。また、米山宏史さんからも千葉県の高校で教えられている周藤新太郎さんの授業書（モンゴル帝国と元寇についてのもの）を送って頂いた。私は益々授業書を作ってみたいと考えるようになった。

昨年から覚えたワープロの技術を試してみたいということや今年採択した教科書（実教出版「高校世界史 改訂版」）に先史世界がないこともあり、ひと味違った世界史学習の導入ということで、先史世界をテーマとした授業書を作ってみることにした。内容は、次の8つのテーマから構成されている。すべて、今まで授業で行っていたテーマである。今回、授業書の形に再構成してみた。

- ① 問題1—第1話 「あし」と「あたま」
- ② 問題2—第2話 石器を作った猿人と絶滅した猿人
- ③ 問題3—第3話 北京原人はプロメテウスであった

- ④ 問題4—第4話 ネアンデルタールの”優しき心”
- ⑤ 問題5—第5話 狩猟のまじない
- ⑥ 問題6—第6話 人間は何にいちばん汗を流したか
- ⑦ 問題7—第7話 農耕はバナナから始まった
- ⑧ 問題8—第8話 農耕発祥地は条件の悪い？山岳地帯であった

「問題」・「話」の文章の作成にあたっては、拙稿「文献一覧」にあげられているものにすべて依拠している。「文献一覧」にあげられているものの文章をそっくりそのまま利用させてもらった部分も数多い。私のした仕事は、問題文・選択枝を適当に考えたこと、文献一覧にあげられたものを高校生にも分かりやすく要約したこと、生徒の関心をひきやすくするため適当に表・カット等を入れたことなどである。予め断わっておきたい。

これから、1987年4月に2年生4クラス(2・4・6・8組)を対象に8時間かけておこなった「世界史 授業書 先史世界の人々—人類出現から文明までの道のり—」の実践を報告する。

I 「授業書」とは何か

授業書とは仮説実験授業で使う教科書である。仮説実験授業とは、国立教育研究所の板倉聖宣氏によって、1963年以来提唱されてきた科学教育の理論である。板倉聖宣「仮説実験授業のABC」(1977 仮説社)、板倉聖宣・上廻昭「仮説実験授業入門」(1965 明治図書)が基本的文献なので、詳しくはこれを参照してもらいたい。

仮説実験授業は、最初理科教育の面で唱えられ、このごろでは歴史を始めいろいろな教科で実践されるようになってきた。板倉氏自身「科学上のもっとも基本的な概念や原理・原則を教えるということを意図した授業である」と定義している。従来の教授法がどちらかというと、学問成果をいかに能率的にかつ合理的に教えこむかに、重点がおかれていたのに対し、板倉氏は出来るようになっても楽しくないのではという疑問を提している。そうかといっても、子供たち(生徒達)「自分で考えなさい」「自分でやってみなさい」といっても途方にくれてしまうのが現実であるとも言っている。この問題を解決するために、板倉氏らは「授業

書とそれにもとづく独特な授業運営法」を産みだした。これが仮説実験授業である。

次に、実際の授業運営法について簡単に説明しておく。授業書の内容は「問題」が中心になっている。「問題」というのは、問題文と予想の選択肢、理由欄からなっている。ときにはヒントを入れる場合もある。これを最初に生徒に配布する。生徒は問題を読み、その予想となぜその考えにいたったのかの理由を記入する。その後、予想を挙手させてその結果を黒板に集計する。予想は数の少ない順に、数名選んで発表させる。その方が少数派のものが意見を発表しやすいようだ。これが討論にいたれば大成功といえる。発表・討論によって自己の意見を変更したいものもあるので、再び挙手させて、その数を黒板に集計する。最後に問題・話の印刷されているプリントを配布して、読みながら確認する。

II 「授業書」

世界史 授業書

先史時代の人々

人類出現から文明までの道のり



1987年4月

秩父高校 2年2・4・6・8組

問題 1

進化論によれば、人間は猿から進化したといわれているが、それなら、動物園にいる猿もいつかは人間になるはずである。しかし、実際はそうはなりそうもない。人間は確かに猿と同じ様な生活をしてきた時代があった。では、一体どのようにして今日の人間が誕生したのであろうか。人間として進化しはじめたのはどの部分からと思うか。

【予想】

①足から（直立して二足歩行することができるようになってから）

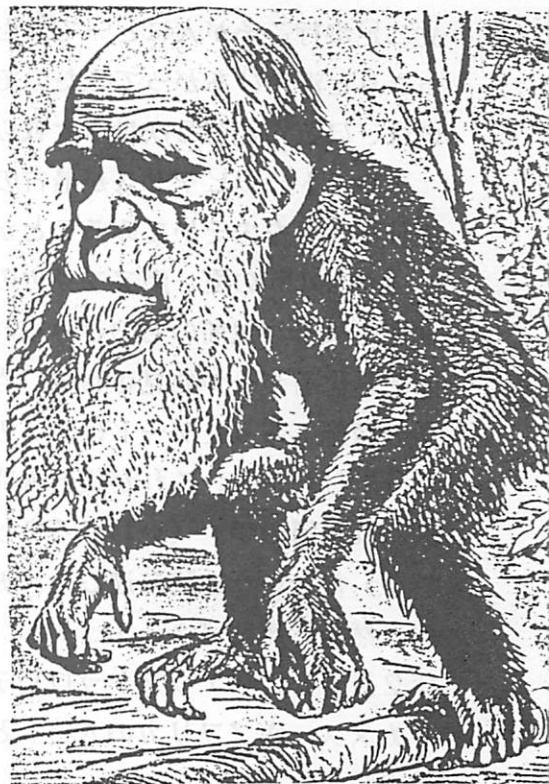
②頭から（脳が発達し、すぐれた知識をもてるようになってから）

③口から（自由に言葉を話せるようになり、意志伝達がスムーズになってから）

④手から（自由に手を操作し、道具を作れるようになってから）

⑤内臓から（肉、穀物、木ノ実、野菜など
どんな物でも食べられるようになってから）

なぜそう思うのか、理由があったら出してみよう。



▲進化論の提唱者ダーウィンを皮肉った当時の漫画

第1話 「あし」と「あたま」

私たちは、ものごころのつくころ、まず最初にいろんなことを知りたがる。この知りたいという欲望、言いかえれば、知る力、理性、ないし頭脳の良し悪しが、人間と動物のあいだのこえがたい壁となってそびえており、だから人間を生物学的にみる場合でも、人間は「あたま」から進化してきたのだとごく単純に信じられてきた。

確かに、人間と猿を分け隔てているのは「あたま」の良し悪しであるという、これまでの考え方が、すべてまちがっているわけではない。けれども、人と猿とを隔ててきたのが「あたま」の良し悪しであるといった場合には、明らかに誤りである。アウストラロピテクスという化石人骨の研究が進むにつれて、人と猿とを分けるのに決定的な役割をはたしたのが「あたま」でなく「あし」であり、直立二足歩行こそが人にとって最も古く、奥深く、根本的な特徴であることが、はっきりと浮かびあがってきたのである。このことが広く信じられるようになったのは、ほとんど第2次世界大戦以降のことである。

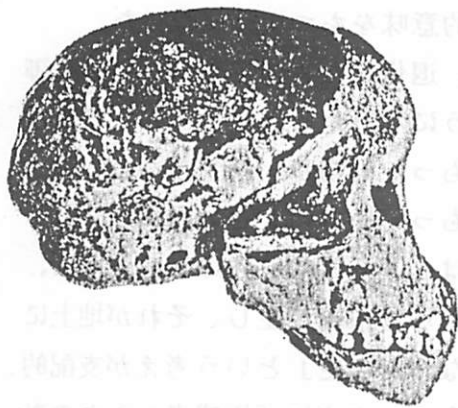
アウストラロピテクスが最古の人類と認められるようになるまでの研究者たちの仕事ぶりをのぞいてみることから話を始めたい。

1924年の夏、南アフリカのヨハネスブルクに近いタウングスで、第一間氷期またはそれ以前のものと思われる地層（約200万年前）から、ヒトニザルの頭蓋骨化石が一つ発見された。当時その大学の教師であったダートは、この骨をくわしく分析した結果、これが猿と人間をつなぐ「失われた鎖の輪」（いわゆるミッシング=リンク）だという結論に達した。彼はイギリスの自然科学雑誌『ネイチャア』（翌1925年2月号）に「アウストラロピテクス・アフリカヌス—南アフリカの人猿」という論文を発表した。

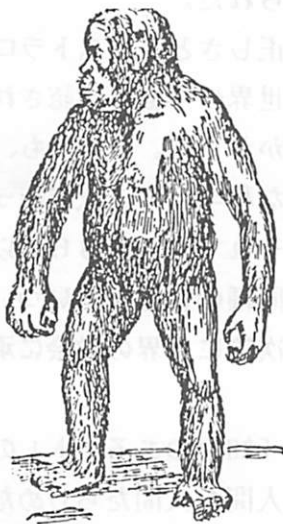
ダートがこの結論を出した理由は、三つある。第一に、頭蓋骨全体の形状が猿よりもず



タウング・ベビーを手にするR・ダート博士



世界で初めて発見されたアウストラロピテクスの頭骨。1924年、タウングで発見された6歳ぐらいのこどものもの。顔面と下顎骨、頭骨の前3分の1からなり、頭骨内につまっていた石灰の鈎型が残っていたところから復元された。



ブルーム自筆のタウン
グ・ベビー復元想像図

移動のための器官としてずっと大きな意義をもっており、一方、前足（手）は、移動の補助器官という当初の機能から解放され、デリケートな触覚器官として、また、精密で目的をもった巧みな行動をするための知識の発達

っと人間に近いということ。すなわち、頭の形が丸いうえに現生ヒトニザルのすべてを特徴づける目の上の骨の隆起がまったく認められないことがあげられる。第二に、歯がまったくヒト的だということ。すなわち、犬歯の先がごくわずかしか他の歯面より突き出しておらず、門歯（切歯）がほとんど垂直であることがあげられる。第三に、あごの形全体も、猿やチンパンジーのように矩形ではなく、人間のに似た馬蹄形をしていたということ。

また、ダートは第一永久歯のほかは乳歯しかもっていないので人間にすれば六歳ぐらいの幼獣であろうと考えられたこの動物の脳の容積を、成体になったとき、ゴリラとほぼ同じ600ccぐらいであろうと考えている。

さて、頭が丸いということは、この動物の行動を推察するうえで重要な特徴である、とダートは論じている。なぜか？そのことは、垂直に近い脊柱（背骨）のうえにあたまがのっていたことを示しているから。すなわち、この動物が完全な直立二足歩行をしていたことを示唆している。この動物においては、後足（足）は

脳容積のおおよその変化

チンパンジー	394cc (平均)
オランウータン	411 " (")
ゴリラ	506 " (")
猿人	435~540
ホモ・ハビリス	700~800
ホモ・エレクトス	850~1220
旧人	1300~1600
新人(現代人)	1300~2000

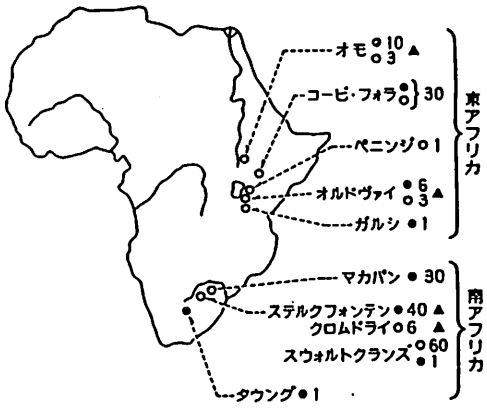
▲脳容積の変化

を保証する道具として、また、攻撃と防御の武器として、重要な進化的意味をもつようになった。

「二足歩行をし、退化した犬歯をもち（手が防御的機能をはたすようになったことを示す）、さまざまな人間的特徴をもった動物が、ゴリラなみの脳（600cc）しかもっていない」という田舎学者ダートの発見と学説は、「高等な猿類のあるものに、突然に大きな脳をもった系統が生じ、それが地上に降りたって人間になったのだ」という考えが支配的であった当時の学会で、すぐに「権威者」たちの激しい批判にあった。なかには、ダートがゴリラのこどもがチンパンジーの骨をまちがえたのだという主旨の大変失礼な反論も寄せられた。

ダートの先駆者的洞察の正しさとアウストラロピテクスの地位の重要性とが世界の学会に承認されるのは、この後30年余りもかかった。ダートも、時代より進み過ぎていた偉大な科学者の一人であった。ダートの見解の正しさは、それでも1936年以降、しかしとくに47年以降、同種の化石があいついで発見されるようになって、次第に世界の学会に承認されるようになった。

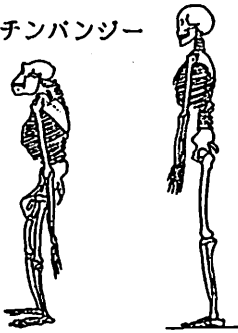
ホモ=サピエンスつまり「知恵のあるヒト」の学名が示すように、それまで人間を人間たらしめたのは、知能の発達と信ぜられてきた。知恵を宿す脳の発達の如何が、人間として認めるか否かの決め手と、従来目されていた。人間の進化の過程で、まず直立二足歩行に適した体制を獲得し、脳の増大はその後起こったとみななければならない。これこそ、アウストラロピテクスとその化石の証拠によってもたらした画期的な発見であった。



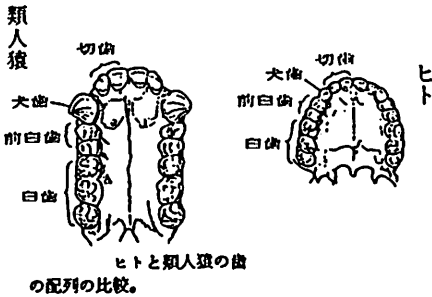
南アフリカおよび東アフリカ出土のアウストラロピテクス類分布図。●はアウストラロピテクス・アフリカヌス、○はアウストラロピテクス・ロブストゥス、▲は石器。数字は出土個体数を示す。

▲アフリカ出土のアウストラロピテクス

▼ヒトとチンパンジーの比較



ヒトとチンパンジーの骨格の比較。



ヒトと類人猿の歯の配列の比較。

問題 2

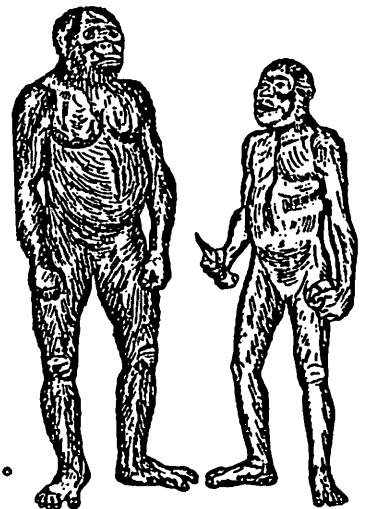
アウストラロピテクスには、2つのタイプの化石人骨が発見されている。これは、現在、アウストラロピテクス・ロブストス（Rタイプ）と、アウストラロピテクス・アフリカヌス（Aタイプ）という学名で区別されている。ところで、この2つのタイプの猿人には、同じ仲間とはいえ、かなりの違いがある。Rタイプは、身長165-180cm、体重60-70kg、脳容積530cc（平均）という「ごつ型」。Aタイプは身長130-150cmと小柄で、体重30-40kg、脳容積442cc（平均）という「きゃしゃ型」。両者を比較してみると、RタイプよりAタイプの方が劣弱であるといわねばならない。ちなみにチンパンジーの平均値は、体重45kg、脳容積395ccといわれており、Aタイプの猿人はチンパンジーより体力で劣り、頭脳はややすぐれている程度といっ

てよい。
私達ホモ・サピエンスの祖先にあたるのは、はたしてどちらのタイプであったのだろうか。

【予想】

- ①Rタイプ（ごつ型）の方
- ②Aタイプ（きゃしゃ型）の方
- ③Rタイプ（ごつ型）と
Aタイプ（きゃしゃ型）の混血型

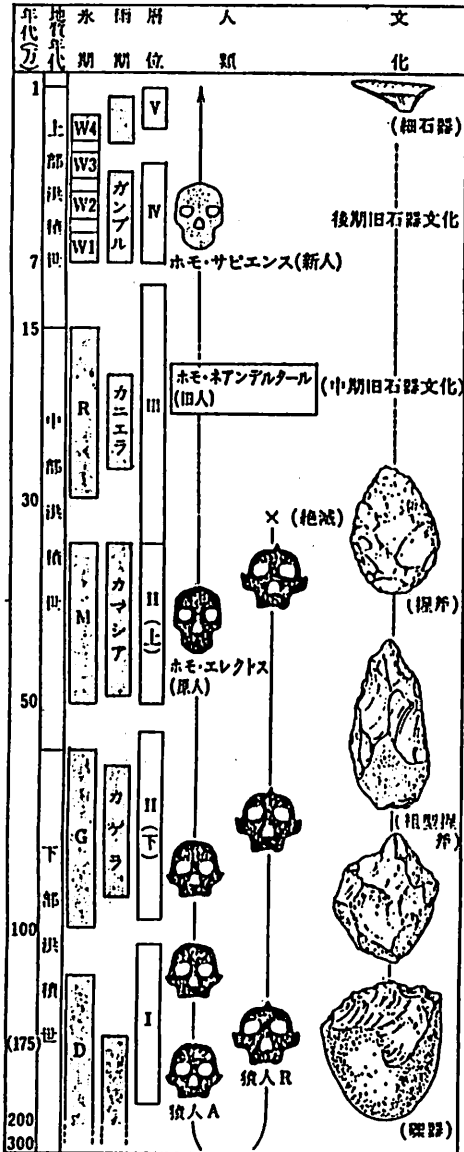
どうしてそう思うのか、理由があったら出してみよう。



R-タイプ(左)とA-タイプ(右)の猿人復元図

第2話 石器を作った猿人と 絶滅した猿人

▼オールドバイ遺跡の 人類と道具の進化



東アフリカのタンザニア共和国、ビクトリア湖の東方にオールドバイ溪谷というところがある。ここの数十メートルにおよぶ初期人類文化の堆積層のなかには、猿人たちが人類として進化していく道すじを示す、非常に示唆に富んだドラマのシナリオがかくされている。

オールドバイ文化の発掘と研究に生涯をかけたリーキー博士夫妻によると、この遺跡の初期文化層からは、2つのタイプの猿人化石が発掘されている。それは、リーキー博士によって、ジンジャントロプス・ボイセイとホモ・ハビリスと命名された。前者がRタイプ（ごつ型）の猿人であり、後者がAタイプ（きゃしゃ型）の猿人である。

ところが、リーキー博士の研究によれば、この2つのタイプの猿人のうちで、オールドバイ文化の担い手、すなわち、石器を作り、それを使ったのは、体力・頭脳とも劣弱なはずのAタイプの猿人であったことが明らかにされている。

さらに興味深いことは、オールドバイ遺跡での両者の出土関係をもてみると、Rタイプの化石は、最下部の第Iから第II層上部にまで発見され、一方、Aタイプの化石も第I層から第II層の中部にかけて発見されている。ということは、総延長30キロメートル余のオールドバイ溪谷のなかで発見された遺跡群を中

心とした地域では、約百万年間、体つきも、おそらく、体質や生活のしかたもちがった2種類の猿人の仲間があるときには、隣合うようにして住んでいた可能性があるということになる。

なお、Aタイプの猿人化石が出土しなくなる第II層上部からは、ホモ・サピエンスの直接の祖先になるホモ・エレクトス（原人）の化石が発見され、それはホモ・ネアンデルタール（旧人）段階を経て（オールドバイでは、旧人の化石人骨は未発見）、ホモ・サピエンスへとつながっていくものと推定されている。

こうした事実にもとずいて、リーキー博士がホモ・サピエンス出現の過程について図式化した仮説によれば、Aタイプの猿人こそがホモ・サピエンス直系の祖先であり、Aタイプの猿人がホモ・エレクトス（原人）に進化をとげるとまもなく、Rタイプの猿人は絶滅してしまったというのである。

なぜ体質的に劣弱なAタイプの猿人が人類進化の主流になり、Rタイプの猿人が絶滅したのかという理由は1つの仮説としても、人類とは何か、人類とその文化の進歩とは何かを考えさせる重要な命題である。リーキー博士は、化石人骨にみられる進化の痕跡とともに、さきにふれたように、Aタイプの猿人が道具の製作者であり、使用者であったことを重視している。そして、猿人の粗雑な礫（石）器が、原人の精巧な握斧に変化していく過程を、たくさんの発掘資料にもとずいて考古学的に証明した。

以上のことを、アメリカの人類学者クラーク・ハウエル博士は、もっとドラマチックに説明している。

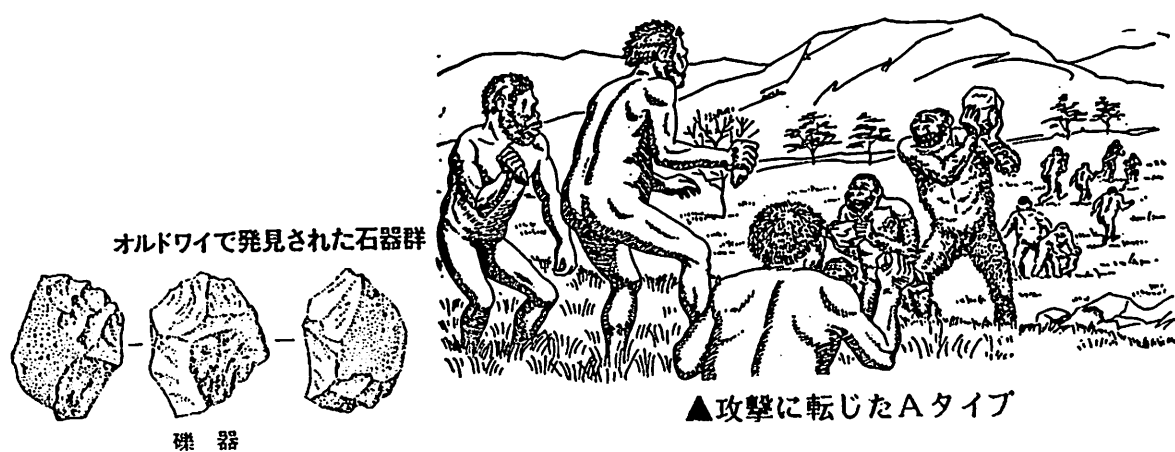
▼人類の進化

紀元前	50万年	40万年	30万年	20万年	10万年	5万年	1万年
地質年代	洪		積		紀		世
代	初	中	期	末	期	沖積世	
人	オーストラロピテクス	ジャワ直立猿人 北京原人	ネアンデルタール人		クロマニヨン人		現代人
類	猿人類 〔前期旧石器時代〕		原人類 〔中期旧石器時代〕		新人類 〔後期新石器時代〕		

はじめ、猿に近い人類の祖先は、みんな森の中の樹上で生活していた。ところがアウストラロピテクスが生きていた洪積世の初期には、何回かの全地球的な気候の変化があった。そんな気候の変化のある時期に、いくつかの猿人グループのなかで、力の強いものたちは、自分の生活の拠点である森と、そこから得られる食料を独占的に守るために、力の劣弱なグループを森から追い出した。そして、植物性食物の採集にたよる樹上の生活をずっと変えることなく維持し続けてきた。それがたとえばオールドバイにいたRタイプの猿人であった。

一方、森から追い出され、やむなく樹から地上におりたつたAタイプの猿人たちは、すぐに、地上をわがもの顔に徘徊する猛獣から身を守らなければならなかった。獣を倒す鋭い爪や牙を自らの肉体に備えていなかった彼らは、足元ころがっている石ころや棒切れを武器として、襲いかかる獣に対抗した。やがて、猿人たちは、はじめは万が一の機会だったかもしれないが、その武器で獣を殺すことができることを経験した。そればかりででなく、倒した動物の肉や内臓が、栄養価の高い、ときには美味しい食料であることを知るようになった。

そのときから、猿人の姿勢が防御から攻撃へと転換した。そこに狩猟という人類最初の労働が誕生するのである。労働としての狩猟の体験の蓄積が、狩猟の技術の発達をうながし、同時に狩猟具＝石器の改善を必要とさせる。その改善の努力が石器に表現され、親から子へ、子から孫へと受け継がれていったにちがいない。こうして、着実に人類への道を歩みはじめたAタイプの猿人は、きびしい自然のなかで、自分たちの生活しやすい環境の範囲をひろげ、同時にみずからの身体的な進化をとげつつ、いま地球上を支配する人類と、その人類が残した莫大な技術を生み出す基盤を作り上げたのである。



問題 3

1918年に、北京の南西約36マイルにある周口店の洞窟（約50万年から20万年前の地層）から動物の化石が発見され、1921年には、スウェーデン人のアンダーソン博士によって人類の2本の歯の化石と石英片（石器）が、27年には1本の歯の化石が発見された。当時、北京共和医学院の教授であったデビッドソン・ブラック博士が、これを研究しシナントロプス・ペキネンシス（北京原人）と名づけた。29年にはほぼ完全な頭蓋骨が発見され、39年までに40体以上におよぶ骨が発見されている。

彼らは、幅5メートル、奥行き100メートルもある洞窟を住居としていた。ここからは、大量の動物骨と石器がでてきている。不思議なことに出土した動物骨は、黒く焼けこげていることが多く、たて裂きにされた痕跡がある。このことから、どのような理由が推測できるか。

【予想】

- ①落雷などの野火の侵入によって洞窟内が焼失した。
- ②野火によって焼け死んだ動物を洞窟内に運んで食べた。
- ③動物の肉を火を使って焼いて食べた。

どうしてそう思うのか、理由があったら出してみよう。



▲北京原人の頭部復原像

第3話 北京原人は プロメテウスであった

猿人はほとんど大部分がアフリカで発見されている。鮮新世の終わりごろには体が大きくなり、脳も増大した新しい人類が出現し、アジアにも広がっている。彼らはホモ・エレクトス（原人）と総称されている。猿人たちが熱帯か亜熱帯の地域にしか住んでいなかったのに対し、原人たちはかなりきびしい気候帯でも、その生活の痕跡を見られるようになる。そのなかの1つ、北京原人の生活を紹介し、彼らがどうして環境に適用できたか考えてみよう。

北京原人の住んでいた華北は、概して今より暖かく、雨も多く亜熱帯的気候であったと思われる。北京原人の生活した時期は、50万年前から30万年前におよぶ。動物相や植物相層の研究からその間の気候は、寒冷から温暖にむかい、再び寒冷化したといわれている。いっしょに発掘された動物には古代象、古代サイ、剣歯虎、かもしか、だちょう、鹿、馬、ハイエナ、狼などの骨があり、火を使い、狩や漁を行ない、打製の石器を用い、木ノ実の貯蔵を行っていたと考えられる。集団で生活し、言語をもちいていた。成人の身長は、男150cm、女140cmぐらいであり、約40体の4割が子供のうちに死んでいる。20歳以上に達したのは約1割にすぎない。彼らの生活は大変きびしいものであったといえる。

北京原人が火を使ったことに注目してみよう。火の使用は人類進化のうえで一つのエポックになるほど大切なことなので、ここでその意味を考えてみよう。

火を使いこなす技術が身につけていけば、気温の低いところでも、虎や狼、ハイエナなど野獣の横行するところでも、キャンプの設営は容易であった。火は食物をやわらかくし、消化不良のものも可能にし、生肉にすくう寄生虫や病原菌などの害からも逃れることができ、食性はいちぢるしく安全で豊富になり、向上した。また、上下のあごで物をかみくたく食事から解放されたので、ゴリラのように、そしゃく筋が頭骨全体を包む状態から解放し、脳の発展をうながすことができるようになった。

火の使用は狩の面にも活用された。象のような超大型獣もさかんに狩した。夜目のきかない獲物などをたいまつなどで溪谷や沼のようなところに追い込み、自由を奪っておいて、やすやすと安全にしかも、一挙に大量の収穫をあげることができた。

問題 4

イラクのシャニダール洞窟の発掘に関する、アメリカの学者ラルフ・ソレッキ博士の報告は興味深い。

1957年から58年にかけての発掘で、落盤事故で死んだ、大変奇妙なネアンデルタール人男性の化石が発見された(4万6000年前のもの)。調査団によって、「ナンディ」と名づけられたその男は、生まれたときから体が不自由であった。まず、右腕がひじの関節の上からなかった。さらに右肩甲骨、右上腕骨の発育が不十分だった。また、右目が見えず右頭骨に傷までおっていた。現代でも、これだけの傷害をおっていれば、大変なハンディキャップである。しかし、不慮の死をとげるまで、彼は当時としては、異例ともいえる40歳という長寿を保った。彼が生きながらえたのは、なぜだと思うか。

【予想】

- ①あまりのグロテスクな姿だったので、仲間から神として恐れうやまれた。
- ②狩で負傷したので、グループの功労者として、仲間が世話をした。
- ③仲間から迫害を受けたので、グループからはなれ一人でひっそりと生活していた。
- ④仲間が、グループ内の弱者である彼に保護を与え面倒をみていた。

どうしてそう思うのか、理由があったら出してみよう。



▲ネアンデルタール

旧人に属す。20万年前に出現。1856年ドイツで出土、以後世界各地で発見。

第4話 ネアンデルタールの ”優しき心”

ナンディと名づけられた老人が不慮の事故まで長寿を保ちえたのは、ネアンデルタール人がきわめて、人間らしい心情をもっていた証拠だと思われる。

彼はむろん狩猟も採集もできなかつたろう。当時の世界では、働けないものを養っていくほどの余裕はなかつたにちがいない。しかし、仲間は、彼に十分な世話をし、一つの役割を与えていた。彼のそばから2つの炉が見つかった。彼は狩猟・採集をする仲間の中で、炉を守っていたのである。おそらく、歯と左手を使って、自分にできる作業を立派にこなしていたにちがいない。しかし、シャニダールを襲った地震は、大音響をたてて、天井から石を落下させた。ナンディは頭に落雷を受け、絶命した。外から帰ってきた仲間は、事故を発見して、「なんでい死んだんだ」と悲しんだ。手近の石をナンディの遺体の上に積み、持ち帰った獣を彼にそなえた。遺骨のそばから見つかった2、3の動物の骨がそのことを物語っている。炉を守ってくれていたナンディは、仲間から十分な愛情と敬愛を受けていたのである。

シャニダールの洞窟からは、もうひとつの感動的な事実が明らかになっている。調査団は、ナンディと異なる時期（約6万年前）に死んだ、他のネアンデルタール人化石の周囲の土を採取し、バリの有名な古植物学者アルフレッド・ルロウ・グーラン女史のもとに送った。そして、7年後、彼女は顕微鏡下に驚くべき発見をおこなったのである。ある人骨化石の周囲からは少なくとも、8種にのぼる花粉と花卉の破片を見つけた。風で洞窟の中に花粉が運び込まれたのではないことは、何十個もの花粉がかたまつて見つかったことで明らかだ。仲間が洞窟の中に持ち込み、遺体のそばに置いたのである。花粉から確定できた花は、キク科、ユリ科、マオウ科などの7種である。注目に値するのは、このなかに、今でも薬草として利用されているものがあることだ。たとえば、ノコギリソウ属は傷口治療に、キオン属は湿布に利用されている。彼らがすでに薬草の利用を知っていたのだろうか。もしそうとするなら、人類による最古の薬の使用の証拠として、死者への献花以上の意味を持つことになる。ソレッキ博士は、シャニダール洞窟のネアンデルタール人を「最初に花を愛でし人々」とよんでる。

ネアンデルタール人にも人間としての優しき心がめばえはじめていたことを、私たちは決して忘れてはならない。